

# 「ネパール支援なお必要」

現地派遣の長大教授が報告

## 公衆衛生など対策強調

長崎

4月に起きたネパール大地震の被災地支援のため、長崎大と国際医療NNGO「AMDA」(岡山市)が現地派遣した同大熱帯医学研究所の医師、山本太郎

教授(51)は公衆衛生学IIが帰国し12日、長崎市の同大で会見した。山本教授は発生から1週間が過ぎ、排せつ物の処理など、今後は公衆衛生的な対策が必要など、復興に向けた切れ目のない支援を訴えた。

山本教授は環境と人体との関わりを研究するため、これまで2度ネパールを訪問。震災後に申し出て、発生5日後の4月30日から5

月5日まで現地を訪れた。首都カトマンズから北東に約100キロの山間部にあるカリチョウ地区にAMDAが設置した仮設診療所で、処置の優先度を決めるなど、医師のサポートをしたり、被災者に安全な水の飲み方を教えたりした。

山本教授によると、診療所には建物の倒壊などで骨折や打撲などを負った患者が、毎日70人程度訪れ、中

には山道を徒歩で4、5時間かけてやってきた人もいたという。山本教授は「山奥に住み診療所にも来られない人たちがいると聞いた。まだ被災者が残されているのかもしれない」と語った。

(坂井彰太)



ネパールでの活動を報告する長崎大の山本太郎教授